

原発の深層がみえた 歴史の瞬間

西村 肇

歴史には底流がある。それは決して目に見えるわけではないが、ときに一部が表面に出ることがある。それは関係者しか知らず、歴史の闇に消える。原子力も例外ではない。

1955年のジュネーブ会議で始まった日本の原子力開発には二つの流れがあった。一つは東京大学工学部教授を核にした米国からの技術導入派、もう一つは素粒子物理学者を中心とした自主開発派である。しかし、当時の政治情勢から「自主、民主、公開」の三原則を基本にした学術会議の自主開発路線が公式には採用され、そのための目的で日本原子力研究所（以下、原研）が創設された。1956年のことである。

その第1期生に、東京大学工学部からは、佐藤一男（電気）、佐野川好母（機械）、鶴尾昭（放射線構造）ら、私の同期生の最優秀の5人が入所し

た。私も原子力を本格的にやるつもりで、大学院では技術導入派の旗頭であった化学工学科の矢木 栄教授（写真1）の研究室に入った。しかし、密かに自主開発派の旗頭である素粒子論の武谷三男 立教大学教授の弟子になっていた。

1959年、実用第1号炉として英国のコールダーホール炉の安全審査が始まった。黒鉛レンガを積上げたもので、明らかに地震国日本には不向きで危険なものであった。このときの原子力委員会安全審査部会には、学術会議を代表して自主開発派で素粒子論の坂田昌一 名古屋大学教授（写真2）が入り、委員長は矢木教授であった。

同年10月末、私が矢木教授の部屋で文献を調べていると、突然、坂田教授が訪ねてきて、「矢木先生、私は安全審査委員を辞めさせていただきます

す」と宣言した。11月の審査部会の最終会議を直前にして、矢木教授の議事運営に決定的な不満があつての発言に聞こえた。矢木教授には相当の打撃にみえた。

しかし、それから2、3日後、日本学術会議会長、原子力委員の兼重寛九郎 東京大学教授から突然の来訪の通知があり、矢木教授は極度に緊張していた。兼重先生はすべての東大教授から恐れられていた人で、呼びつけることはあっても自分から訪ねてくることはない人だったからである。その兼重教授が矢木教授に言ったのは一言、「先生のお考え通りになさいます」であった。そして1週間後、コールダーホール炉は「安全」との審査結果が発表された。矢木教授は国会に呼び出され、安全性の判断と情報公開について神近市子議員らから徹底的に追及された。

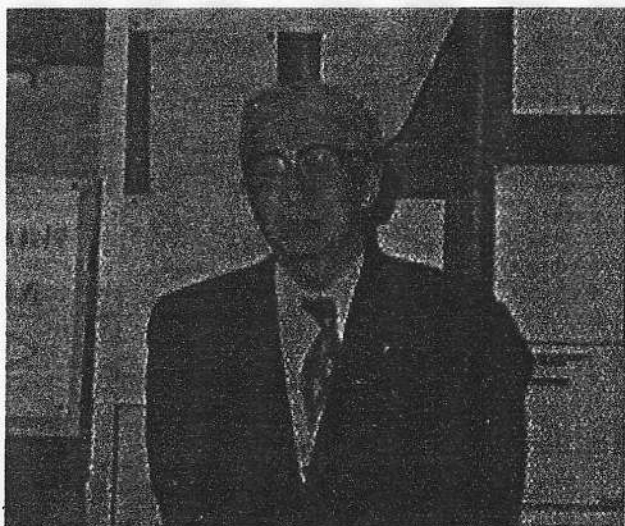


写真1 矢木栄 東京大学教授（古崎新太郎氏 提供）



写真2 坂田昌一 名古屋大学教授（名古屋大学提供）